

日本通訳翻訳学会

第 22 回年次大会

スケジュール
基調講演
予稿集

2021 年 9 月 4 日(土)ー5 日(日)
オンライン開催

日本通訳翻訳学会第22回大会スケジュール

開催日:2021年9月4日(土)~5日(日)

オンライン開催

第1日目 (9月4日 土曜日)

13:00	評議会	院生コロキウム (Zoom B)
13:30		
13:30	理事会	
13:50		
14:00	総 会 (Zoom A)	
—		
14:50		
15:00	基 調 講 演 (Zoom A)	
	Professor Daniel Gile, ‘What (conference) interpreting practitioners know, what interpreting researchers know’	
16:30	司会：佐藤 美希	

第2日目 (9月5日 日曜日)

会場	Zoom A	Zoom B	Zoom C	Remo
8:45	オープニング			
9:00	A-1 【司会: 山田 優】 「高等教育機関による『ISO13611: 2014 通訳-コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与と言語運用能力に関する適正テスト実施についての考察」佐藤 晶子(大阪観光大学)、林田 雅至(大阪大学)、小森 三恵(大阪観光大学)	B-1 【司会: 松下 佳世】 「大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト中間報告:遠隔授業に関するアンケート」高橋 絹子(関西大学)、大井川 朋彦(日本大学)、石塚 浩之(広島修道大学)、稲生 衣代(青山学院大学)、内藤 稔(東京外国語大学)	C-1 【司会: 大久保友博】 “De-feminizing translations: The case of Wakamatsu Shizuko’s translation of ‘The Sailor Boy’” Paula Martínez-Sirés (日本大学)	懇親スペース 自由に利用できます。空き時間の情報交換や質疑応答の継続、ディスカッションなどにお使いください
9:30				
9:40	A-2 【司会: 山田 優】 「翻訳プロジェクト策定プロセスに関する国際標準化に関する考察: 『ISO17100:2015』の視座より」佐藤 晶子(大阪観光大学)、Andrew MIGHTA-MEEHAN(株式会社ミーハングループ)	B-2 【司会: 松下 佳世】 「実務レベルの逐次通訳ノートテイキング指導」熊谷 ユリヤ(札幌大学)	C-2 【司会: 大久保 友博】 「Our Bodies, Ourselves のフェミニスト翻訳の試みと読者受容」古川 弘子(東北学院大学)	
10:10				
10:20	A-3 【司会: 山田 優】 「在中国日系企業における中国人通訳者の理解について:通訳者に必要な「場」の知識の蓄積」矢橋 耕二(広島大学大学院 D)	B-3 【司会: 松下 佳世】 「ノートテイキングの指導を中心としたビジネス通訳クラスの実践報告」森下 美和(神戸学院大学)	C-3 【司会: 大久保 友博】 「太平洋戦争・日本占領期におけるキリスト教宣教関係者の翻訳通訳活動」武田 珂代子(立教大学)	
10:50				

	Zoom A	Zoom B	Zoom C	Remo
11:00	A-4 【司会：稲生 衣代】 「対話通訳における発話の意図と行為の再生の考察：医療通訳学習者のビデオ・エスノグラフィーを用いた教育の可能性について」 飯田 奈美子(日本学術振興会特別研究員)、榎田 美雄(神戸市看護大学)	B-4 【司会：高橋 絹子】 「ピアスピーチ通訳演習を通じたデリバリの向上と通訳態度の変化」 山崎 美保(関西大学・同志社大学)、石原 知英(鹿児島大学)	C-4 【司会：藤濤 文子】 「日本語・シンハラ語の擬音語と擬態語の翻訳における直訳不使用の効果と意義」 バーラスーリヤ バーラスーリヤ ムディヤンセラゲ ウダーニ スガンディカー (宇都宮大学 M)	懇親スペース 自由に利用できるように解放します。空き時間の情報交換や質疑応答の継続、ディスカッションなどにお使いください
11:30				
11:40	A-5・6 【司会：稲生 衣代】 「通訳・翻訳研究における会話・談話分析アプローチの可能性」研究プロジェクト報告 飯田 奈美子(日本学術振興会特別研究員)、篠原 有子(立教大学)、神藤 理恵(フリーランス通訳者/明治大学)、田辺 希久子(フリー通訳者)、田村 智子(国際基督教大学)、坪井 睦子(立教大学)、チャン・ティ・ミー(フリーランス通訳者)、蓮池 通子(フリーランス手話通訳者)、水野 真木子(金城学院大学)、吉田 理加(立教大学)	B-5 【司会：高橋 絹子】 「EFL(English as a Foreign Language)環境下における「精話(せいわ)」活動とその効果」 飯塚 秀樹(獨協医科大学)	C-5 【司会：藤濤 文子】 「日ア語翻訳に見られる異文化伝達とそのアプローチに関する考察」 上川 アルモーマンアブドラー(東海大学)	
12:10				
12:20		B-6 【司会：高橋 絹子】 「中国の大学における外国語教育と通訳訓練：学部生の通訳課程を例に」 楊 潔氷(河南理工大学)	C-6 【司会：藤濤 文子】 「漫画作品におけるキャラクター言語の英語翻訳：『SPY×FAMILY』のアーニャとヨルの言葉遣いとキャラクターを考える」 イーヴァンソン 房枝(ヨーテボリ大学)	
12:50				
	休 憩			
13:30	A-7 【司会：吉田 理加】 「コロナ禍における通訳者の稼動状況」 高橋 絹子(関西大学)	B-7 【司会：石原 知英】 「機械翻訳と英語教育～アンケート結果を基に～」ラングリッツ久佳(愛知工業大学)、山田 優(立教大学)、入江 敏子(愛知工業大学)、大西 菜奈美(関西大学大学院 D)、小田 登志子(東京経済大学)、田村 颯登(関西大学大学院 M)、平岡 裕資(株式会社翻訳ラボ)、守田 智裕(名古屋市立豊田高校)	C-7 【司会：古川 弘子】 「重訳」の再考——韓国絵本『あめだま』の考察を通して」 尹 恵貞(一橋大学)	
14:00				
14:10	A-8 【司会：吉田 理加】 「変革する日本の通訳業界の現状」 大竹 純子(東京外国語大学)、高橋 絹子(関西大学)	B-8 【司会：石原 知英】 「通訳学習者による英日翻訳方略の学習可能性」 山本 真佑花(立教大学)、山田 優(立教大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)	C-8 【司会：古川 弘子】 「2002 年～2018 年のベトナムにおける日本の翻訳書に関する研究」 Nguyen Thanh Tam(神戸大学)	
14:40				

	Zoom A	Zoom B	Zoom C	Remo
14:50	A-9 【司会：瀧本 真人】 「通訳の仕事に対する社会的認知の低さの問題：通訳教育における講義科目の役割考察」西畑 香里(東京外国語大学)	B-9 【司会：石原 知英】 「翻訳教育におけるメタ認知向上を中心としたオンライン学修設計：持続可能な学修を目指して」井上 泉(沖縄国際大学)	C-9 【司会：篠原 有子】 「NHK 国際放送の歴史：NHK WORLD・JAPAN に至るまで～課題と今後の展望」高橋 弘行(NHK 国際放送局)	懇親スペース 自由に利用できるように解放します。空き時間の情報交換や質疑応答の継続、ディスカッションなどにお使いください
15:20				
15:30	A-10 【司会：瀧本 真人】 「東京圏と北海道の実態調査に基づく通訳業務の比較考察：通訳という仕事が通訳者にもたらす幸福度を考える」板谷 初子(北海道武蔵女子短期大学)	B-10	C-10 【司会：篠原 有子】 「司法通訳における倫理観と倫理教育－欧米基準を基にした日本の現状分析と将来への提言」毛利雅子(名古屋市立大学)	
16:00				
16:10				懇親会
17:10				

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてののみ手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、Zoom のルーム移動のための時間です。
- 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。
- Remo は懇親スペースおよび懇親会会場としてご利用いただけます。

※ Remo 利用案内

- ・ 右記が Remo の公式 HP です。利用方法などをご参考になしてください。 <https://jp.remo.co/>
- ・ 2 日目の 9:00 から自由に利用できるように解放しますので、空き時間の情報交換や質疑応答の継続、ディスカッションなどにお使いください。
- ・ 研究発表後の懇親会にもふるってご参加ください。
- ・ 書籍の情報収集なども Remo でご利用いただけるよう予定しております。詳細が決まりましたら学会ウェブサイト(<https://jaits.jp/>)およびメーリングリストで配信予定です。当日どうぞご活用ください。
- ・ Remo に常駐する実行委員はおりません。ご了承ください。

[第 22 回年次大会実行委員会]

佐藤美希(札幌大学)、石塚浩之(広島修道大学)、齊藤美野(順天堂大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)

◎ 参加者の皆様へ

- 大会への参加は、以下の URL のオンライン申し込みフォーム(Google フォーム)でお申し込みください。学会 HP にもリンクがあります。また、会員の皆様にはメーリングリストでもお知らせします。

・年次大会申し込みフォーム:<https://forms.gle/cFANi8cra8bvwT7N9>



・日本通訳翻訳学会 新ホームページ: <https://jaits.jp/>

- 今年度は、返信用ハガキでの大会出欠確認は必要ありません。会員の皆様にはハガキを送付していませんので、ご了承ください。
- オンライン申し込みフォームの提出締め切りは、8 月 31 日(火)です。(手話通訳をご希望される方は、準備の関係上、8 月 10 日(火)までに申し込みフォームをご送信ください)
- Zoom ID とパスワード、および Remo のアクセス ID などは、オンライン申し込みフォームからお申し込みいただいた方々に、メールで 9 月 1 日(水)以降に送付する予定です。9 月 3 日(金)正午(JST)になっても、メールが届かない場合は、大会実行委員会(jaitstaikai2021@gmail.com)までご連絡ください。
- 学会として、Zoom と Remo への参加に関わる技術的なサポートはいたしませんので、あらかじめご了承ください。
- 他者への Zoom ミーティング情報の転送・公開は、お控えください。
- Zoom ミーティング参加中の録音・録画・撮影は、ご遠慮ください。なお、記録のため、学会が総会や基調講演、数件の発表を撮影する必要があることをご了承ください。

◎ 発表者の皆様へ

- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿／二重発表、無断引用などには十分ご注意ください。
- 発表資料の提供については、各発表者の判断でお願いいたします。参加者に提供可能な場合は当日 Zoom のチャット機能で共有してください。発表後に参加者から資料提供に関する問い合わせなどがある場合は、各自でコンタクトを取っていただけますよう、お願いいたします。
- 発表資料を画面共有する場合は、発表者ご自身でお願いします。
- ミーティングルームには余裕を持って入室してください。

第1日目(9月4日) 15:00-16:30

基調講演 (英日同時通訳付き)

**What (conference) interpreting practitioners know,
what interpreting researchers know**

Professor Daniel Gile,

AIIC, Université Paris Sorbonne Nouvelle (パリ第3大学名誉教授)

要旨

Distinctions are made between experiential knowledge and received knowledge. Both types are always associated with some uncertainty. Scientific research seeks to both decrease uncertainty and extend knowledge.

Through personal experience and from reading and hearing others, interpreting practitioners have much knowledge about interpreting. Most of it has been acquired in their immediate environment, which makes generalizations hazardous, and they are limited in their perception of some interpreting-related phenomena by sensory and cognitive boundaries, along with various types of biases which can prevent them from detecting such phenomena or cause them to misperceive them.

Most researchers working on conference interpreting are practitioners and/or interpreter trainers themselves. They tend to look at topics which they consider directly relevant to their interpreting practice (e.g. interpreting cognition, interpreter training, quality expectations and perception) and start with knowledge gained through practice. There are also researchers working on interpreting from within cognate disciplines such as linguistics, cognitive psychology and sociology, who tend to focus on topics which are of interest to their mother discipline (e.g. types of bilingualism or the transfer of cognitive skills from interpreting to activities not related to interpreting), but are often perceived as less relevant to interpreting practice. Such researchers tend to start with theories and knowledge gained from within their mother discipline, though they may also take on board received knowledge gained from the words of practitioners.

Scientific research offers several advantages over experiential knowledge: in particular, it is a more powerful way to decrease or measure uncertainty of existing knowledge and to check generalizability, is less vulnerable to psychological and sociological biases and has tools that increase sensitivity to phenomena that experiential knowledge may not be able to detect.

It also has drawbacks: one is that it tends to discard as very uncertain experiential knowledge that it cannot observe or measure with high-quality indicators. Another is that through its propensity to seek generalizations, it tends to overlook or discard 'local', idiosyncratic knowledge, in spite of its local relevance to interpreting practice. Another limitation is that overall, when it complies with the central principle of caution, it tends to progress relatively slowly. Finally, as a social, competitive activity, it introduces biases of its own.

Setting aside the relative advantages and drawbacks of scientific research, its ability to reduce uncertainty and extend knowledge is limited by the power of its tools and by human and material resources, as well as by the considerable variability found in interpreting-related phenomena.

One potentially important question for practitioners of interpreting who believe extending their knowledge and reducing uncertainty could be beneficial to them is to what extent, all things considered, there is real gain to be expected from research. A few examples will be offered for consideration.

During the presentation, authentic examples of studies with research questions, research methods and associated findings and challenges will be explained to illustrate the points made above.

プロフィール

会議通訳者、国際会議通訳者協会（AIIC）会員。学術博士（日本語、言語学）。INALCO（フランス国立東洋語学校）、リヨン第 2 大学等を経て、2007 年よりパリ第 3 大学通訳翻訳高等学院（ESIT）教授。現在は同大学名誉教授。欧州翻訳研究協会（EST）会長（2004-2007, 2007-2010）、同諮問委員。上海外国語大学名誉教授、広東外語外貿大学客員教授（2008-2011）。日本通訳翻訳学会名誉会員。CIRIN Bulletin editor。

数多くの論文や著作があり、単著として *Regards sur la recherche en interprétation de conference* (1995, Presses Universitaires de Lille)、*Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training* (1995, John Benjamins) [邦訳：『通訳翻訳訓練 — 基本的概念とモデル』]、*La traduction. La comprendre, l'apprendre* (2005, Presses Universitaires de France)。他に共編著多数。

司会： 佐藤 美希(大会実行委員会)

第2日目(9月5日) Zoom A 9:00 – 9:30

A-1 司会：山田 優

高等教育機関による『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与と言語運用能力に関する適正テスト実施についての考察

佐藤晶子(大阪観光大学)、林田雅至(大阪大学)、小森三恵(大阪観光大学)

2021年5月、大阪観光大学が認証機関となり、公衆衛生分野における日本語英語、ポルトガル語、中国語の四か国語の言語組合せによる『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン』の認証を通訳者に授与した。いずれの認証授与者も、2019年以来上記言語の組合せによる言語運用能力を測る適正テストを受検し、80%(CEFR B2レベル相当)を超える成績を収めた上で、審査を経た後に認証授与式に臨んだ。

本発表では、国際標準化機構の翻訳、通訳および関連技術の国際規格を策定する第37委員会第5分科会(ISO/TC37/SC5)が2014年に発行した上記規格の高等教育機関による多言語の認証授与について考察することを目的とする。具体的には、認証授与に際し実施したコミュニティ通訳サービス提供者の言語運用能力を測る適正テストについての分析を行い、高等教育機関の現行カリキュラムを通じて、特定分野におけるコミュニティ通訳者養成について検討する(林田・印南, 2019, <https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000521.php>)。

2014年のISO13611:2014 *Interpreting — Guidelines for community interpreting* (コミュニティ通訳に関する一般指針)発行以降、通訳サービスに関するISO国際規格の策定・発行が行われてきた。2018年にはISO18841:2018 *Interpreting services — General requirements and recommendations* (通訳サービスの一般要求事項と推奨事項)、2019年にはISO20228:2019 *Interpreting services — Legal interpreting — Requirements* (法務通訳サービスの要求事項)、2020年にはISO21998:2020 *Interpreting services — Healthcare interpreting — Requirements and recommendations* (通訳サービス—医療通訳—要求事項と推奨事項)が発行された。2019年以降、通訳一般ではなく専門分野に特化した国際規格の発行が続いている。

国際医療通訳者協会(International Medical Informatics Association: IMIA)、欧州法務通訳者・翻訳者協会(European Legal Interpreters and Translators Association: EULITA)、国際会議通訳者協会(International Association of Conference Interpreters: AIIC)等の組織は、ISO/TC37/SC5 リエゾン組織として深く関わり、翻訳・通訳国際規格策定に関し、情報提供を行っている(水野, 2015, pp.80-81)。

本発表では、大阪観光大学の他に『ISO13611:2014』認証機関となっている大学院教育を専門とするオーストリア科学技術研究所(Institute of Science and Technology Austria)による『ISO13611:2014』認証についても触れ、認証機関としての高等教育機関のあり方についても考察する。

【参考文献】

水野真木子・内藤稔(2015)『コミュニティ通訳:多文化共生社会のコミュニケーション』80-81.

ISO. (2014). *ISO 13611:2014 Interpreting - Guidelines for community interpreting*. Geneva: ISO.

林田雅至「言語の壁を越える「働き方」の一つの指針」『大阪大学』(<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000521.php>)

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom A 9:40 – 10:10

A-2 司会：山田 優

翻訳プロジェクト策定プロセスに関する国際標準化に関する考察:『ISO17100:2015』の視座より

佐藤 晶子(大阪観光大学)、Andrew MIGITA-MEEHAN(The Meehan Group)

本発表は、発行から 5 年を経た現行の『ISO17100:2015 翻訳サービス-翻訳サービスに関する要求事項』(以下『ISO17100:2015』という)の規定に従い、時流に沿った組織内翻訳サービス提供業務の提案を行うことを目的とする。

同規格の附属書 A で示された組織内翻訳サービス提供者の翻訳ワークフロー (ISO,2015,p12)をはじめ、用語の定義、業務上欠かせないプロジェクト責任者の範囲等、『ISO17100:2015』に追記が必要な要件が出現しているのではないかという問いに、実現可能な対応策を提案する。

そのためには、IT 技術の発展に伴い、今後ますますその重要性が高まると考えられ、附属書 E に掲載された翻訳メモリ (TM) やコンピュータ支援翻訳 (CAT) ツールを使った翻訳、機械翻訳 (MT) の進化 (ISOa,2015,p17) 等の現状を分析する。

また、同規格 5.3.3 で「バイリンガルチェック担当者は翻訳者以外の人でなければならない」規定に従うが、附属書 B、B3b) で許容されている「翻訳者自身によるバイリンガルチェック」により、上記 TM、CAT、MT の活用の頻度を高める提案も視野に入れる (ISOa,2015,p13)。

国際標準化機構の翻訳、通訳および関連技術の国際規格を策定する第 37 委員会 (ISO/TC37) は言語と専門用語に関する標準化を広く取り扱う。我が国の製造業をはじめとする産業のグローバル化に伴い、重要な役割を果たす翻訳・通訳について第 5 分科会 (SC5) を設置して活動している。この ISO/TC37/SC5 で策定された『ISO17100:2015』発行以来、日本で 60 件近い認証取得 TSP が誕生しているが、個人で認証を取得している TSP は一名のみである (JSA, 2021, <https://shinsaweb.jsa.or.jp/MS/Service/ISO17100>)。本発表では、上記現状に鑑み、特に一般企業・団体・大学・研究機関の組織内翻訳業務を担う部署および個人による『ISO17100:2015』のさらなる利活用のある場を検討する。

なお、本発表は、経済産業省に採択された「戦略的国際標準化加速事業」の「翻訳プロジェクト策定プロセス、観光通訳および情報付与プロジェクト管理に関する国際標準化」のうち、「翻訳プロジェクト策定プロセス」に関する共同研究について発表するものである。

【参考文献】

ISO. (2015). *ISO 17100:2015 Translation services -- Requirements for translation services*. Geneva: ISO.

日本規格協会ソリューションズ (2019)「ISO 17100 認証取得組織」『日本規格協会ソリューションズ審査登録事業部』 (<https://shinsaweb.jsa.or.jp/MS/Service/ISO17100>)

第2日目(9月5日) Zoom A 10:20 – 10:50

A-3 司会：山田 優

在中国日系企業における中国人通訳者の理解について:通訳者に必要な「場」の知識の蓄積

矢橋 耕二(広島大学 D)

中国で経済活動を行う多くの日本企業では、現地で雇用された中国人社員が通訳業務を担当している。平塚(2010)等によれば、通訳者は話し手の発言をそのまま聞き手に伝えているのではなく、話し手の意図や場の状況(コンテキスト)を理解し、それによりどう訳出するかを判断している。では通訳者はなぜ話し手の発言の意図を理解することが出来るのだろうか。

日本、中国ともに高コンテキスト社会であるが、それぞれ異なる文化に基づくコンテキストのため、両者の会話の多くは低コンテキストで行われることになる。低コンテキスト・コミュニケーションでは話し手の言葉、表情等の情報が理解するための重要な要素であるが、社内通訳では同僚に関する知識、組織の方向性、過去の経験等の情報も必要である。中国人通訳者は日本人駐在員が言語化しなかった発言の背景を共有してその意図を理解し、中国人社員が彼らのコンテキストで理解出来るよう訳出する。Mey(1993)によると、理解とはコンテキストに基づいた信憑性のある推量であり、中国人通訳者は話し手と聞き手のコンテキストに基づいて彼らの意図を推量していることになる。しかし実際の社内通訳場面では中国人通訳者が日本人駐在員の意図を十分に理解出来ず、誤訳や訳し漏れが生じて業務に支障を来すことがある。その主な原因は言語能力ではなく、彼らが日本人駐在員や中国人社員と共に勤務する場における共通経験の密度によるのではないだろうか。

本研究では、社内通訳の現場における中国人通訳者の訳出から、彼らが何を理解しているのかを分析した。その結果、同僚との共通経験により得た知識を使用して推量する力が社内通訳者の理解に影響を及ぼし、その理解に基づいて訳出時に追加説明や省略、調整を行っていることが明らかになった。彼らの推量する力は業務環境や業務内外における同僚との会話の蓄積によりもたらされていた。

このような社内通訳行為は言語、非言語として表面化した要素だけではなく、社内という場における同僚との共通経験の蓄積を検討することが重要だと考えられる。なぜなら共通経験の蓄積によって通訳者は同僚と共有するコンテキストが徐々に増え、それにより彼らの意図を理解出来るからである。このような職場環境を意図的に作り、共通経験を蓄積することが出来れば、通訳者が同僚と共有するコンテキストが増え、社内コミュニケーションが円滑になり得ると推測される。

【参考文献】

- Mey, Jacob. (1993) *Pragmatics*. Wiley-Blackwell (澤田治美・高司正夫訳(1996)『ことばは世界とどうかかわるか』ひつじ書房)
- 平塚ゆかり(2010)「現代日中通訳者の「信達雅」ーインタビュー分析を通してー」『異文化コミュニケーション論集』第8巻 pp.45-55

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom A 11:00 – 11:30

A-4 司会： 稲生 衣代

対話通訳における発話の意図と行為の再生の考察：医療通訳学習者のビデオ・エスノグラフィーを用いた教育の可能性について

飯田 奈美子（日本学術振興会特別研究員）、樫田美雄（神戸市看護大学）

在留・訪日外国人の増加により医療通訳の資格化が進み、厚生労働省は 2013 年「医療通訳育成カリキュラム基準」を制定し、これには医療知識、通訳倫理等以外に通訳演習が含まれている。通訳演習はシナリオを用いたロールプレイ方式が用いられ、これは医療知識・用語が含まれた会話の訳出における正確性達成が教育の主眼となっている。しかし、対話通訳における参与者間の相互行為の理解の達成をどのようにすべきかについての訓練はなされていない。

本研究の目的は、医療通訳学習者が対話通訳実践において、発話の意図と行為の再生の技術を習得していく必要性を考察し、その習得方法としてビデオ・エスノグラフィーの活用が有効であることを提案する。対話通訳では、原語で発せられたメッセージが原語で理解されたときに起きる反応を目標言語の聞き手に起こすために、発話の意図と発話の効力の再生をすることが目指される(Hale 2007)。しかし、医療通訳教育において発話の効力の再生が対話通訳において重要であるとの認識も低く、またその技術を習得する教育課程も確立していない。

研究方法は、特定健康保健検診の再受診の事前問診場面を設定し、看護師役(日本語母語話者)と患者役(中国語母語話者)がシナリオなしの会話を行い、医療通訳学習者がその場で会話内容を聞いて通訳を 2 回行い、通訳終了後フィードバックを行った。そして、その様子を録画したものを後日会話分析の手法に則ったトランスクリプトを作成し、会話分析にて分析を行った。

録画の分析から、医療通訳学習者が対話通訳において生起する2つの相互行為上の課題の解決を適切に行うことができていなかったことが観察された。まず、①医療通訳学習者が訳出を始めるためのターン(発話順番)を適切に捉えられていないこと。さらに、②知らない専門用語が出てきたときに、その場のコミュニケーションの目的に沿った形式で、訳出に必要な情報を聞き出し訳出を行うことが適切にできていなかったことである。この 2 つの行為は、その場のコミュニケーションの目的(特定健康保健検診に問題ありとされた患者に対する指導)の達成に向けた行為となっておらず、それより行為の再生ではなく、行為の変容が行われていたことが明らかになった。さらに、対話通訳における行為の再生を訓練していく一つの方法として、本調査で用いたビデオ・エスノグラフィーの有効性について述べる。

【参考文献】

Hale, Sandra Beatriz, (2007) *Community Interpreting*, Hampshire: Palgrave Macmillan.

第2日目(9月5日) Zoom A 11:40–12:50

A-5・6 [特別発表 60 分] 司会： 稲生 衣代

「通訳・翻訳研究における会話・談話分析アプローチの可能性」研究プロジェクト報告

飯田 奈美子（日本学術振興会特別研究員）、篠原 有子（立教大学）、神藤 理恵（フリーランス通訳者/明治大学）、田辺 希久子（フリー通訳者）、田村 智子（国際基督教大学）、坪井 睦子（立教大学）、チャン・ティ・ミー（フリーランス通訳者）、蓮池通子（フリーランス手話通訳者）、水野 真木子（金城学院大学）、吉田理加（立教大学）

通訳・翻訳研究におけるパラダイムの社会的転回以降、欧米では、会話・談話分析手法が広く用いられるようになり、研究手法の広がりが生じているが、日本国内では会話・談話分析を通訳・翻訳研究で用いた研究は未だ少ないといえる。このような背景の下、2018年度からJAITS研究プロジェクトとして研究を進めてきた。プロジェクトの1年目はメンバーが行っている研究についての発表と、国外の通訳・翻訳における会話・談話分析研究の調査を行い、会話・談話分析の基礎知識について学びを深めた。2年目には、会話・談話分析において重要な過程である音声談話の文字化について、転記（文書化）のシステムの異なりに着目し、参加メンバーの個人研究成果や実践知、国内外の文献などから研究報告を行った。3年目は米国人俳優が出演した映画作品のプロモーションのために来日した際のプレミア記者会見（逐次通訳・字幕付き）動画を通訳研究と（字幕）翻訳研究の異なる視座からメンバー全員で検討した。

本報告では上記にも述べた3年間にわたる研究プロジェクトの総括として、これまでの研究活動と成果を報告し、プロジェクトメンバーによるラウンドテーブル式討論を以下の要領で実施する。

1. プロジェクト趣旨説明並びに活動と取り組み報告

3年間のプロジェクトの活動報告をまとめ紹介する。

2. 通訳を介した映画俳優の記者会見動画についてのラウンドテーブル

複数の英語話者俳優と複数の通訳者が参加している映画のプレミア記者会見（逐次通訳、日本語字幕付き）という状況を、通訳研究と翻訳研究の視座から会話・談話分析を行い報告する。

2.1 通訳研究の視点からの分析と考察

参与者並びに通訳者間のターンテイキングや通訳者の通訳規範からの逸脱と役割などに注目して分析、考察する。

2.2 翻訳研究の視点からの分析と考察

会見参与者・通訳者の発話と日本語字幕に着目し、字幕によって構築される参与者のジェンダーやアイデンティティなどの相互行為的テキスト、またファンサブなどとも共通する字幕の大衆化という現象に着目して分析、考察する。

3. 質疑応答

【注】

映画配給元にリモート学会において動画を再生する許可を申請中である。許諾がとれなかった場合は、動画再生無しで上記の内容を報告する。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom A 13:30 – 14:00

A-7 司会：吉田 理加

コロナ禍における通訳者の稼働状況

高橋 絹子(関西大学)

2019 年に中国に端を発した新型コロナウイルスの感染拡大により、世界の至るところでさまざまな影響が表れている。日本では 2020 年 4 月に第 1 回目の緊急事態宣言が発出され、国の内外にわたり人の移動に制限が設けられたり、不要不急の外出に自粛要請が行われたりしたことなどもあり、その影響は通訳者にとってもはかり知れないものがあると予測される。そうした通訳者を取り巻く変化のひとつとして、「遠隔通訳」があげられるが、これに関しては 2020 年 8 月に大規模なアンケートによる調査が実施され、結果はすでに発表されている(松下 2021)。しかしこの調査から 2021 年 3 月現在では、すでに 7 ヶ月を経ていることを鑑み、その後の変化と現状における実態を調査すべく同年 3 月から 4 月にかけて 11 人の通訳者に Zoom を用いて構造インタビューを実施した。質問は先行研究(松下 2021)のアンケート項目にも基づいて作成し、さらに現状に関する考えなど自由に意見を述べてもらった。

先行研究では、遠隔通訳の未経験者が回答者の 17.5%であったのに対し、調査時には、インタビュー参加者 11 人全員が、遠隔通訳、もしくは日本側だけが感染対策を講じて集まるハイブリッド型のみで稼働していた。これは遠隔通訳が定着していることをうかがわせる結果となった。メリットでは、新たに「移動の費用がかからない」という経費面での報告が複数あった一方で、デメリットでは「依頼者側とちょっとした雑談などのやりとりができない」という点があげられた。今後の見通しに関しては、先行研究(松下 2021)では、「いずれはオンサイトの通訳授業が戻ってくることを予測、または期待していることが伝わってきた」とあるが、インタビューの結果からは、「今後、遠隔通訳が主流になるのではないかと思います」との回答が多く、変化に柔軟に対応する姿勢が感じられた。また通訳の稼働状況に関しては、先行研究の調査時では需要が激減していたことが報告されていたが、3 月の年度末という要因も加わり、稼働がコロナ禍以前の水準に戻っている参加者も見られた。本研究の分析結果が今後、コロナ禍で稼働する通訳者の一助となり、また通訳(者)がどういうものであるかを考える研究に寄与することを期待する。

【参考文献】

松下佳世(2021)「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』第 20 号: 125-146

第2日目(9月5日) Zoom A 14:10 – 14:40

A-8 司会：吉田 理加

変革する日本の通訳業界の現状

大竹純子(東京外国語大学)、高橋絹子(関西大学)

本研究では、新型コロナウイルスの発生以来、日本の通訳者を取り巻く環境がどのように変化し、その通訳者に業務を提供する国内の通訳産業が業界としてどのような変遷を遂げているのかということに関して業界分析を行う。2019 年末に発生し、世界中に広まった新型コロナウイルスにより、国によって状況は異なるものの海外への渡航が著しく制限され、ロックダウンなどの措置が取られた。2020 年 4 月には、日本でも緊急事態宣言が発出され、それ以来、人流の抑制を行い、人同士の接触を極力減らす目的で、職場においては在宅勤務、また教育現場においては遠隔授業が推奨され、導入されることとなった。

ではその結果、基本的には複数の異言語を話す人間が集い、対面でコミュニケーションをとる言語活動の場面において必要とされる通訳という行為やそれを担う通訳者は、どのような影響を受けているのであろうか。またその結果、任務に携わる通訳者の斡旋や紹介を主とする通訳業界は、具体的にはどのような影響を受けて、どのような変遷を遂げているのであろうか。例えば、海外では、早くから通訳者と依頼者が同じ場面に存在することなく行われる遠隔通訳が導入されていたとの報告があるが(Pöchhacker, 2004)、2020 年 8 月に行われた通訳者を対象とした遠隔通訳に関するアンケート調査の結果では、コロナ禍以前に日本でも遠隔通訳が行われていたことは明らかではあるものの、まだそれほど普及してはいなかった(松下 2021)。またさらにこの調査では、通訳者の稼動は前年に比べて、減少していたと報告されている(松下 2021)。

この先行研究の調査は対象が通訳者のみであったことから、通訳市場の現状を把握するためには通訳者の斡旋や紹介を行う側であるエージェントを対象とした調査も必要であると考えた。そこで 2021 年 4 月 14 日から 2021 年 5 月 25 日にかけて、大手を含む通訳エージェント 5 社の担当者に構造インタビューを行い、遠隔通訳など手法の変化も含めて、通訳市場をとりまく状況がどのように変化しているのか聞き取り調査を行った。公表されている経済データも合わせて結果を詳しく分析し報告を行いたい。さらに今後の通訳市場の見通し及び業界構造の変化についても考察を行うとともに、通訳者に求められるスキルや要件は、どのように変わったのかを市場から分析し、コロナ禍で模索する通訳者にはなんらかの提言を行うことを目的とする。

【参考文献】

- 松下佳世(2021)「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』第 20 号:125-146
 Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London and New York: Routledge.

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom A 14:50 – 15:20

A-9 司会：瀧本 真人

通訳の仕事に対する社会的認知の低さの問題：通訳教育における講義科目の役割考察

西畑香里(東京外国語大学)

本研究は、通訳の仕事に対する社会的認知の低さの問題について取り上げ、大学の通訳教育における講義科目が果たしうる役割について考察するものである。通訳の仕事については、2 つの言語ができれば誰でもできるとの誤解を持たれていることが多い。日本で通訳訓練を受け有償で通訳業務に携わる通訳者を対象にキャリア形成に関する通訳者の認識を調査した新崎他 (2020) では、通訳者が認識している問題の一つに「社会的認知の低さ」があることが確認されている。また、通訳者が実現を望むキャリアについて、「公に認められた専門職制度に基づいて、社会やクライアントの正しい理解の下で、社会から敬意を払われ、エージェントによる十分な仲介により適切な環境で仕事を行い、通訳者組織や仲間とさらに切磋琢磨してスキルの向上に努め、ワークライフバランスを実現できるようなキャリア」(p19) とし、その実現のためには通訳者の世界に関わる行為者による働きかけ、および行為者に対する働きかけが必要であると結論づけている。通訳者の世界に関わる行為者としては、「通訳者個人」「同業者」「通訳者組織」「エージェント」「クライアント」「社会」「研究者・学会」が挙げられる。その行為者が通訳の仕事を正しく理解できるようになるために、教育現場でできることはないかを考え、講義科目の役割に着目したのが本研究の趣旨である。

染谷他 (2005) が行った大学・大学院における通訳教育の実態調査では、講義科目が開講されている割合は全体の 4%の結果であった。大学教育における通訳関連科目としては通訳演習を行う授業が多くを占め、講義科目の実践報告を含めた情報も比較的少ない。講義科目は受講者数が非常に多いことが特徴の一つとしてあげられ、大人数クラスをいかに運営するかも講師が直面する大きな課題となる。西畑 (2021) では、大人数クラスでいかに参加型授業を実現させるのかについて、2019 及び 2020 年度の通訳概論クラスの実践を通して課題の特定と対応策の考察を行った。本発表では、その成果をもとに 2021 年度に実践を行った事例も含め、どのようにして講義科目の内容に通訳の仕事に対する社会的認知の低さの問題を取り上げたか、また今後講義科目を開講する際にはどのようなことに留意すれば参加型授業を実現した授業運営につながると考えられるかについても言及する。

【参考文献】

- 西畑香里 (2021) 「大人数クラスの参加型授業の実現に向けて—講義科目『通訳概論』のオンライン授業の事例から—」『通訳翻訳研究』 20: 103-123.
- 新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里 (2019) 「キャリア形成に関する通訳者の認識」『通訳翻訳研究』 19: 1-21.
- 染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』 5: 285-310.

第2日目(9月5日) Zoom A 15:30–16:00

A-10 司会：瀧本 真人

東京圏と北海道の実態調査に基づく通訳業務の比較考察：通訳という仕事が通訳者にもたらす幸福度を考える

板谷 初子(北海道武蔵女子短期大学)

本発表では、通訳という職業から得られる幸福度を幸福の経済学の観点から考察する。本発表の目的は、通訳という職業に対する理解を深め、通訳指導者がキャリア形成指導を行う際に有用となる情報を提供することである。

本研究では、日本通訳翻訳学会「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクトが2017年に実施した質問紙調査のデータを用いて、東京圏と北海道の通訳者が通訳の仕事から得ている主観的な満足度を比較した。その結果、「経済的満足度」と「社会的認知度に対する満足度」について有意な差が確認された。この有意な差は両地域の平均稼働時間には約4倍の差があり、平均月収には約5倍の差があるという就業状況の差を反映していると考えられる。しかしその一方で、仕事に対する「精神的満足度」には統計的な有意差がみられなかった。経済的、社会的な満足度に有意な差があるにもかかわらず、精神的満足度に有意な差がないという結果は、経済学における「順応仮説」「相対所得仮説」「選好のシフト仮説」などの理論仮説を用いて説明することができる。

仕事に対する精神的満足度を高める三大要素は、趣味との境界があいまいな「創造性」、人と接して人を助ける「他者援助性」及び「向上心」であるが、通訳という仕事はこのすべての特性を備えており、さらにこれらの特性は活動拠点に依存しない。そのため東京圏と北海道の通訳者(そしておそらく北海道以外の地方在住の通訳者)との間には得られる所得に格差があるものの、幸福度の観点からすれば個々の通訳者にとって最良の活動拠点は必ずしも東京圏に限らない。このことは、幸福度の地域間格差は所得の地域間格差ほど大きくないという先行研究結果からも支持される。

したがって、通訳業はライフデザインの一部であり、目指すべきは通訳業を含む自分らしい生き方の追求であると結論できる。質問紙調査のデータ分析結果から導かれたことは、通訳という仕事に対する関わり方は様々であるが、仕事における幸福度に大きな差はないということである。そのため通訳指導者は、個々人が自分の生活に適したキャリアデザインをするよう指導することができる。言い換えると、通訳者のキャリアは国際会議の同時通訳を頂点とするピラミッドのような一極構造のように捉えられるものではなく、個々人の人生観に合わせて選択できる多数のパスが存在するキャリアであることが示されている。

【参考文献】

- 板谷初子(2021)「東京圏と北海道の実態調査に基づく通訳業務の比較考察:通訳という仕事が通訳者にもたらす幸福度を考える」『MITIS Journal』3: 33-54.
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎(2013)『日本の幸福度』日本評論社
- 新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里(2019a)「日本における通訳者のキャリア開発プロセスに関する実態調査」『通訳翻訳研究』19:115-136.
- 橘木俊詔・高松里江(2018)『幸福感の統計分析』岩波書店
- 山根智沙子・山根承子・筒井義郎(2008)「幸福度で測った地域間格差」『行動経済学』1(0):1-26.

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom B 9:00 – 9:30

B-1 司会：松下 佳世

大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト中間報告:遠隔授業に関するアンケート

高橋 絹子(関西大学)、大井川 朋彦(日本大学)、石塚 浩之(広島修道大学)、稲生 衣代(青山学院大学)、内藤 稔(東京外国語大学)

「大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト」は 2019 年度から日本の大学における通訳教育の実態を調査するために活動している。本プロジェクトは、2005 年に行われた「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」(染谷ら, 2005)のフォローアップ調査を目的とするものである。前回の調査からすでに 15 年の年月を経ていることから、再度同趣旨の調査を行い、データを更新するとともに、この間の変化を明らかにすることを目指している。

そうしたなか、2020 年 4 月に新型コロナウイルス感染症対策のため発出された緊急事態宣言に伴い、多くの大学において遠隔授業が導入されることになった。かつて誰も経験したことのない状況で、多くの教員が個人の工夫で難局を乗り越え、通訳科目の授業を行ったと想定されることから、本プロジェクトでは、今回の非常時における通訳授業の実態についてアンケート調査「日本の大学・大学院での通訳科目における遠隔授業に関するアンケート」を同年 8 月から 9 月にかけて実施した。対象者は、2020 年度前期、日本国内の大学・大学院において通訳科目を担当した教員とし、アンケートは Google フォームを用いて作成した。

その結果は同年 9 月に「大学・大学院における通訳教育研究プロジェクト」第 1 回公開研究会の場で、通訳遠隔授業に関するアンケート調査結果速報として発表した。その後、感染状況を考慮し、地域や大学によっては対面授業が再開されたこともあり、教室での授業を行った講師らの協力を得て、2021 年 3 月にインタビュー調査を実施した。講師らとは「コロナ禍のもとで感染症対策を講じながら実施する対面の通訳授業」というテーマで質疑応答を行い、対面授業再開の際の留意点やオンライン授業との比較などについて聞き取り調査を実施した。

これらの調査を踏まえ、すでに速報済みの項目に関してはさらに詳しい考察を加え、分析していない項目については新たな報告を行う。また今回の発表は、通訳遠隔授業に関する知見を参加者と共有することも目的とし、今後の研究に活用する。

【参考文献】

染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005)「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号: 285-310.

第2日目(9月5日) Zoom B 9:40 – 10:10

B-2 司会：松下 佳世

実務レベルの逐次通訳ノートテイキング指導

熊谷 ユリヤ(札幌大学)

ノートテイキングは、逐次通訳スキルの重要な基本の一つであるが、自己流や試行錯誤を重ねて取得した、ディクテーション的な筆記法で行う通訳者も少なくない。本発表では、通訳学校における実務レベルの英語通訳クラスでのノートテイキング指導の実践報告を行いたい。具体的には、著者が指導する通訳学校の、プロ通訳者が多く在籍する中級および上級クラス 2 クラスでの指導内容と、サンプルノートを紹介したい。また、指導法の枠組は、札幌大学で担当する入門レベルと基礎レベルの通訳授業にも取り入れている。中級、上級レベルと進んでいくうちに、抽象的な語彙や複雑な文の構成ゆえに、次第に聞いたままを書きとる学習者が多くなる。本来は、理解したことを瞬時に分析し、後でノートを参照しながら通訳を行う際のヒントとなる概念やキーワードを簡潔に、構成にも配慮して記録するものである。しかし、3分、5分間となると、英文速記型やディクテーション型、殴り書き型のノートを取り、解読できず、通訳もできないケースが少なくない。効率的で記憶負荷が軽減されるノート指導、特に、日本語ユーザー通訳者に適した指導を行う必要がある。

作業記憶の訓練としては、毎学期の早い段階に、ナチュラルスピードの長めのノートテイキング逐次を行い、書きなぐりでは追いつかず、解読も難しいことを実感させた後で、作業記憶の訓練に入る。リプロダクション訓練や、ストーリーを聞き終えてから時間をおいての、ノートテイキング、日本語文字、特に漢字を簡略化したシンボル、ピクトグラムや記号のみを使用したノートも行う。押しつけできない形で、講師のサンプルメモを提示するビジュアルメモの訓練と定義をすることや、逐次通訳を行う前に、予め素材の候補を与え、瞬間的に頻出が予想される語やコンセプトを表す記号や略語を定義する訓練も有効である。アルファベットしか文字を使えない通訳者とは異なり、簡素化した漢字・カタカナ・ひらがなを駆使できることは、強力な武器になりうる。また、視覚的な文字に慣れている日本語ユーザーは、シンボルのサンプルを提示されることで、クリエイティブなノートテイキングを行うことにつながる。西欧の理論に学びつつも、日本語の文字やシンボル、ピクトグラムをなどの第三言語も活かす、英日/日英通訳に適したノートテイキング指導の、現時点までの成果を報告したい。

【参考文献】

熊谷ユリヤ(2015)「入門レベルの英語通訳ノートテイキング指導」『札幌大学総合論叢』第 39 号: 1-16.

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom B 10:20 – 10:50

B-3 司会： 松下 佳世

ノートテイキングの指導を中心としたビジネス通訳クラスの実践報告

森下美和(神戸学院大学)

発表者は 2015 年度から 2018 年度まで、ビジネス通訳の演習クラスを担当する中で、毎年同じ教材(井, 2000)を使いながら少しずつ授業内容に微調整を加えつつ、同時にノートテイキングに関する調査を続けてきた。対象となる学生は、大学で通訳・翻訳の理論や方法を系統的かつ体験的に学ぶことを目的とした通訳・翻訳プログラムを専攻する 3 年生で、2 年次に 1 年間の海外留学を経験していた。習熟度については、年度によって異なるテスト(Versant English Test, Versant Writing Test, Oxford Quick Placement Test など)を行ったが、CEFR に換算するとおおむね B1~B2 レベルであった。

授業では、各種ビジネス場面を想定した通訳訓練(主に英日逐次通訳)を行い、120wpm 程度の速さで聞き取り、80%程度の正確さで再生・通訳することを目標とした。毎回、2 分程度のビジネススピーチを聞きながらノートを取り、1 パラグラフ程度ごとに通訳するという流れで、個人・ペア・グループ単位での活動を繰り返した。逐次通訳におけるノートは、通訳者の短期記憶容量の限界を補うための重要な手段であるが、現在の大学および民間の通訳養成機関における通訳訓練の中では、ノートテイキングを具体的にどのように指導あるいは習得すべきかについて、コンセンサスが成立していないとされている(染谷, 1994-2015)。授業では、染谷 (1994-2015)、Gillies (2017)などを参考に、主語と述語(動詞)からなる命題のメモを優先する、目標言語である日本語(漢字・ひらがな・カタカナ)も積極的に使用するというアドバイスとともに、よく使われる省略記号を紹介した(森下, 2017 ほか)。

本発表では、言語モデルにもとづいて作成されたモデルノートを提示した場合と自分のノートを作成した場合の逐次通訳について、学生の通訳パフォーマンスやメモの内容の比較の観点から報告する。また、通訳パフォーマンスについてのふりかえりやピアレビューのコメントなどについても紹介する。これまでに得られたさまざまなデータにもとづき、ビジネス通訳クラスの実践方法や通訳ノートの在り方について検討したい。

【参考文献】

- Gillies, A. (2017). *Note-taking for consecutive interpreting: A short course*. London and New York: Routledge.
- Morishita, M. (2018, June). *Notetaking training in a business interpreting class*. Poster session presented at Psychology of Language Learning Conference (PLL3), Waseda University.
- 井洋二郎 (2000)「英語ビジネススピーチ実例集」ジャパンタイムズ
- 染谷泰正 (1994-2015)「英語通訳訓練法入門」(オンライン版)関西大学外国語学部通訳翻訳プログラム用教材
- 森下美和 (2017)「ビジネス通訳クラスにおけるノートテイキング」『ことばの科学研究』第 18 号, 101-109.
- 森下美和 (2018)「通訳クラスにおけるノートテイキングの指導:モデルノートと自分のノートの比較を中心に」言語学習と教育言語学:2017 年度版, 97-102.
- 森下美和 (2020)「ビジネス通訳クラスにおける効果的指導法とは:ふりかえりとピアレビューにもとづく一考察」電子情報通信学会『信学技報』, vol. 119, no. 484, TL2019-62, 39-44.

第2日目(9月5日) Zoom B 11:00 – 11:30

B-4 司会：高橋 絹子

ピアスピーチ通訳演習を通じたデリバリの向上と通訳態度の変化

山崎 美保(関西大学、同志社大学)、石原 知英(鹿児島大学)

大学における初学者を対象とした通訳のクラスでは、通訳プロセスに着目して、原テキストの理解や言語転換、訳出、ノートテイキングなど、様々な観点からの指導がなされている。しかしながら訳出プロセスの最終段階であるデリバリの側面についてはこれまで十分な指導がなされていない。その背景には、限られた授業回数の中での通訳トレーニングにおいて、表情や身振り手振り、声の調子や口調などの非言語要素の指導まで十分な時間が割けないということや、聴解、処理、訳出などの言語的要素の指導を求める受講生のニーズなどがある。一方で、こうしたデリバリの要素は、通訳の質を大きく左右する。通訳者は、話の展開や内容を整理してわかりやすく伝えることに加えて、上記の非言語要素を活用し、聴衆が聞きやすい、理解しやすい通訳を提供できなければならない。

通訳のデリバリの要素には、(a) 抑揚、(b) 声の明瞭さ、(c) 適切なポーズ(スピーカーが話し終わったらすぐに訳出を開始する、また文の終わりには声を少し下げ、短くポーズする等)、(d) 適切なスピード(数字など聞き手が瞬時に理解しにくいと考えられる箇所はゆっくり発音する等)、(e) 適切な声量(声量が小さいと、通訳者に自信がないとみられる向きがある)、(f) アイコンタクト、(g) 柔らかな表情と落ち着き、(h) 非明示的な論理構成などがある。これらの要素は、パブリックスピーキングの要素と重なるところがあり、聞き手を意識した話し方や説得力を持たせる方法等の研究が進んでいる。

これらを踏まえ、本発表では、学部レベルの初学者を対象とした通訳のクラスで、どのようにデリバリの指導を取り入れたか、またそうした実践を通して、受講生の通訳態度がどのように変容したかについて、報告を行う。具体的には、半年間の授業実践の中で行ってきた、学生自らがスピーチを行い、それを聴衆ありの状況で通訳するという「ピアスピーチ通訳演習」の活動を詳述し、本演習を通して、通訳の質、特にデリバリの要素が向上するのか、また受講生の通訳態度の変化を報告する。その結果を踏まえて、今後さらにどのような研究を進める必要があるのかについて、議論したい。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom B 11:40 – 12:10

B-5 司会：高橋 絹子

EFL(English as a Foreign Language)環境下における「精話(せいわ)」活動とその効果

飯塚 秀樹(獨協医科大学 基本医学 語学・人文教育部門)

【はじめに】

日本社会は英語を外国語として学ぶ EFL (English as a Foreign Language) 環境下にあり、そこでは外国語獲得にとって必須となる **exposure** (学ぶ対象となる外国語に接すること)、**use** (その外国語の使用機会)、そして **motivation** (外国語を学ぼうとする意欲) の3点が低減してしまう。現在、我が国の中学・高等学校では「(英語の)授業は英語で行うこととする」という **communicative language teaching** が主流になりつつあるが、**peer interaction** を多用するこの指導法は、上記3点を前提とするもので、日本の環境下でそのような指導を継続すると様々な弊害を誘発してしまう。いわゆる **classroom dialect** (教室内でしか通用しない英語) を身につけてしまうことも、その問題の一つと言えるであろう。

筆者は日本の外国語教育の流れを否定する立場は基本的には取らないが、上記の **exposure** や **use** を補足するための何らかの方略は必須と考える。その一つが今回発表する「精話」に基づく活動となる。精話とは筆者独自の造語で、「語法や音声・文法項目を意識しながら、ゆっくりと丁寧に外国語インプット・アウトプットを試みる手法」であり、具体的にはシャドーイングと逐次通訳ノートからのリプロダクションに基づき、音声言語としての外国語獲得を促進させる手法となる。なお、この精話活動の理論的背景や期待される効果については、Levelt (1989)¹ による **Speech Production Model**、及び門田 (2007)² の **Sound Comprehension Model** に基づき詳述する。

【目的】

今回の発表では、この精話活動が学生たちの外国語4技能獲得にどのような影響を及ぼしたのかについて報告する。

【研究方法】

研究参加者は筆者の勤務大学医学部1年生となり、医学英語 I の授業で精話活動を1学期間行い、その効果を事前・事後テストとして設定した **GTEC Academic** 上で検証した。

【結果】

事前・事後テスト間では4技能全てにおいて点数の上昇が見られたが、特に **productive skills** (産出スキル: **writing** 及び **speaking**) 上のスコアに大きな伸長が見られた。

【考察】

本研究からの知見を、現行の中学・高等学校で行われる **communicative language teaching** に導入できれば、より効果的に授業が展開できることが示唆される。

【参考文献】

- 1) Levelt, W.J.M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 2) 門田修平 (2007). 『シャドーイングと音読の科学』. 東京. コスモピア.

第2日目(9月5日) Zoom B 12:20 – 12:50

B-6 司会：高橋 絹子

中国の大学における外国語教育と通訳訓練：学部生の通訳課程を例に

楊 潔氷(河南理工大学)

近年、中国の大学における外国語教育の方針は「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「訳す」という五技能の訓練になったため、学部三年生と四年生にそれぞれ翻訳課程と通訳課程が増設された。本研究は某大学日本語学科の通訳課程を紹介し、通訳訓練の効果について検討する。訓練方法としてシャドーイングやリピーティングがよく用いられており、受講者数が多いクラスではピア通訳演習も行われている(e.g., 西畑, 2018; 山崎・石原, 2020)。本課程の受講者数は30名であったため、表1のような通訳訓練方法を組み合わせ、通訳課程での実践を試みた。

表1 通訳訓練方法

	訓練方法	詳細
①	穴埋め問題	文章を3回聞き、空欄に単語や句を記入
②	クイック・リーディング	前回の穴埋め問題で用いられた文章を速く正確に音読
③	クイック・レスポンス	日本語(中国語)の単語を聞き、速く中国語(日本語)に通訳
④	リピーティング	日本語(中国語)の文章を一文ずつ聞いてから復唱し、中国語(日本語)に通訳
⑤	ノート・テイキング	日本語(中国語)の文章を3回聞きながらメモを取り、中国語(日本語)に通訳
⑥	ロールプレイ	商談文を三つに分け、三人一組で、日本側・中国側・通訳者を順に演じる
⑦	単文逐次通訳	一人ずつ日本語(中国語)の単文を2～3回聞いてから中国語(日本語)に通訳
宿題	フレーズを20個暗記し、日本語の文章をディクテーション、翻訳、シャドーイング	

実施日程は2020年9月3日～12月17日であり、計15回の訓練であった。1回目では語学力等を確かめるための小テストが行われ、2回目～4回目は基礎訓練を中心に主に①～⑤の訓練方法が用いられ、5回目～14回目は通訳演習を中心に主に①②⑥⑦が用いられた。15回目では予告なしで1回目の小テストが再実施された。12月31日に期末試験が実施された。日本語(中国語)の文を3回聞いてから中国語(日本語)に翻訳する(便宜上、聴訳)という設問に、小テストにおける日中・中日の翻訳文をそれぞれ2文取り入れた。この2文の成績と訓練前後の成績の平均点と標準偏差は表2に示す(満点8点、欠席した1名の成績を除く)。

表2 訓練前後と期末の成績の平均点と標準偏差

日中聴訳			中日聴訳		
訓練前	訓練後	期末	訓練前	訓練後	期末
3.26 (2.50)	4.17 (2.72)	5.48 (2.37)	2.93 (1.56)	3.10 (1.57)	5.55 (1.34)

期末と訓練前後の成績を一要因三水準で分散分析を行った結果、日中聴訳では期末と訓練前後の成績の間に有意な差がみられ($F(2, 56)=23.19, p<.001, \eta^2=.012$)、期末は訓練前後よりも成績が有意に高く($t(28)=6.78, p<.001, r=.79, t(28)=3.99, p<.001, r=.60$)、訓練後は訓練前よりも成績が有意に高かった($t(28)=2.78, p=.007, r=.47$)。中日聴訳においても期末と訓練前後の成績の間に有意な差がみられたが($F(2, 56)=68.36, p<.001, \eta^2=.039$)、期末は訓練前後よりも成績が有意に高かった一方($t(28)=10.45, p<.001, r=.89, t(28)=9.77, p<.001, r=.88$)、訓練前後の成績に有意な差がなかった($t(28)=0.69, p=.495, r=.13$)。つまり、訓練が有効であったが、期末試験の成績重視も結果の一因だと考えられる。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom B 13:30 – 14:00

B-7 司会：石原 知英

機械翻訳と英語教育～アンケート結果を基に～

ラングリッツ久佳(愛知工業大学)、山田 優(立教大学)、入江 敏子(愛知工業大学)、大西菜奈美(関西大学大学院 D)、小田 登志子(東京経済大学)、田村 颯登(関西大学大学院 M)、平岡 裕資(株式会社翻訳ラボ)、守田 智裕(名古屋市立豊田高校)

本稿では、機械翻訳(MT)と英語教育との関わりについて検証する。まず、MT をどの程度使用しているか、それは授業内か、時間外学習でか、英語教育にどのように反映したいか、MT 倫理をどの程度知っているか、ニューラルネットワークについてどの程度知識を持っているか、等々、母語が日本語、及び、日本語以外の有志を対象とし、アンケートを実施した。これを基に、それぞれの解答を比較対照した。相違点としては、「MT を日常的に/授業内で利用するか」において、「利用しない」という回答者は日本人で極めて高く、それぞれ、58.3%、82.2%にのぼるが、一方で、「MT を学習者に禁止している/授業で使いたくない」という回答者は日本人以外が多く、38.4%である。日本語母語話者では「禁止も許可もしない」という回答が 68.7%を占めた。これは、実際には MT に頼っているが、日本人の本音は、日常的にも授業内でも禁止/利用すべき基準を見い出せないということだと推測される。また、「英日翻訳、日英翻訳の MT の精度」に対しては、日本人、それ以外において 4 点 (5 点満点) が最多であった。5 点と回答した者は日英翻訳に対する日本人以外のみであった。このことから、日本人のほうが厳しい見方をしていることが伺える。また、日本人以外は日本語能力の高低により、採点が甘いのかかもしれないことが推測される。他方、類似点も多くあった。「学習者が MT を利用していると思うか」に対しては、両者ともに「思う」という回答が多く、日本語母語話者で 48.7%、それ以外で 54.5%にのぼる。「MT を信用するか」に対しては、それぞれ、48.7%、54.5%が肯定的な回答をした。ニューラルネットワーク技術の知識を有しているか、「ニューラル機械翻訳のしくみを知っているか」に対しては、「全く知らない」が大半であった。「MT と英語教育に関するセミナーが開催されたら参加したいか」に対しては、「参加したい」が大半を占めた。課題としては、相違点で述べた矛盾点の理由である。筆者は、英語学習は自力で行うものだという旧来的な固定観念があったり、学習外においても楽な MT を使うことへの抵抗感があったりするのではないかと考察する。このようなサーチを時系列的に実施し、理由が不明瞭な点に関し検証することが、MT と英語教育との連携の関係性を明らかにするであろうと考える。

第2日目(9月5日) Zoom B 14:10 – 14:40

B-8 司会：石原 知英

翻訳学習者による英日翻訳方略の学習可能性

山本 真佑花(立教大学)、山田 優(立教大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)

翻訳作業(翻訳プロセスと言うこともある)は、言内・言外の様々な要素を考慮して行われる意思決定からなり、その結果が原文・訳文の言語表現(記号)的な操作として表出される。しかしながら、これらの作業における諸々の判断基準や操作の種類や、意思決定と操作の対応関係は、翻訳作業の参与者間の合意形成に使えるほど十分には形式化されていない。言い換えれば、翻訳作業を具体的に記述するための言語(メタ言語)が確立されていない。我々はこれまでに、素朴訳から適訳への言語表現的な操作を「翻訳方略」と呼び、英日翻訳におけるそのような方略を幅広くカバーした方略体系を構築した(山本ら, 2021)。この体系は、Chesterman (2016)の体系をもとに構築されており、Syntactic strategyとして13種類、Semantic strategyとして9種類、Pragmatic strategyとして10種類、計32種類の方略からなる。また、体系の構築時とは異なる事例を用いることで、十分に多様な方略をカバーしていること、個々の言語表現的な操作に対する方略をある程度一貫して特定できることが確認されている。

我々は現在、この英日翻訳方略体系を翻訳教育において活用することを検討している。本発表では、英日翻訳方略体系を翻訳学習者が理解し、実際に英日翻訳の作業に使用できるかを検証するために行った実験について報告する。具体的には、次に示すプレーポスト実験を実施した。まず、課題とは異なる原文とモデル訳を翻訳学習者に提示し、そのモデル訳の特徴を分析させた。そしてプレタスクとして課題文書の原文と素朴訳を与え、素朴訳を編集することによって訳文を作成させた。続いて、英日翻訳方略体系の資料を提供し、それを読み理解させた上で、ポストタスクとして、プレタスクとは異なる文書の原文と素朴訳を与え、同様に訳文を作成させた。このようにして収集した素朴訳と訳文の対から翻訳方略の適用事例を抽出し、プレタスクとポストタスクにおける方略の分布の違いや、モデル訳の作成時に適用された翻訳方略との違いを定量的・定性的に分析した。上記の検証と合わせて、訳出作業に関する翻訳学習者の主観的な感想をアンケート形式で収集し、その分析を行った。これらのデータ分析を通して、翻訳学習者の英日翻訳方略体系の理解度を検討した。

【参考文献】

Andrew Chesterman. (2016). *Memes of translation: The spread of ideas in translation theory*. Amsterdam: John Benjamins.

山本真佑花, 山田優, 藤田篤, 宮田玲, 影浦峯. メタ言語としての翻訳方略体系の構築と検証. 言語処理学会第27回年次大会発表論文集, 2021.

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom B 14:50 – 15:20

B-9 司会：石原 知英

翻訳教育におけるメタ認知力向上を中心としたオンライン学修設計: 持続可能な学修を目指して

井上 泉(沖縄国際大学)

2019 年に端を発した COVID-19 は今なお世界各地に甚大な影響を及ぼしており、「after コロナ」の社会像は未だ見いだせてはいない。教育・学修も多大な影響を被っている。対面学修に変わり、オンライン学修を中心とした非接触型の学修形態への転換、なおかつ前者と同等の主体的で深い学びの実現が求められている。さらに、テクノロジーの急速な進歩によるグローバル化が今後も加速することが見越されている。このような変化は VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) といった用語に代表されるように、予測不能、かつ制御困難な世界をもたらすものと考えられている。このような時代において、翻訳教育・学修も、柔軟かつ持続可能なコンピタンスの養成を主眼とした学修の設計と実施が必要となる。換言すれば、ファデルら(2018)が指摘するように、予測される社会の方向性に基づいた学修設計ではなく、社会においてどのような変化が生じようとも、言わば「サバイバル」できる能力を養成できる学修設計が鍵を握ると言えよう。この能力が OECD(2013)などの提唱する、「21 世紀型スキル」である。一連のコロナ禍というピンチをチャンスと捉え、より柔軟な学修形態を用いて、21 世紀型スキルを兼ね備えた持続可能なプロフェッショナル養成が現在の翻訳教育にも求められていると言えよう。本発表では、21 世紀型スキルの中でも特にメタ認知力に焦点を当てることとする。というのも、上述の社会における翻訳者による自律的かつ持続的なコンピタンスの習得において、メタ認知力が鍵を握ると考えられるからである。

本発表ではまず、上述の VUCA な社会における 21 世紀型スキル及び翻訳教育におけるメタ認知力向上について論じる。次に、これらの概念に基づいた翻訳教育における学修設計について、沖縄国際大学の翻訳教科において導入したオンライン学修の学修設計を例に挙げながら、報告し考察する。同実践例においては、より効果的な学修を実現すべく、学修目的・学修方法・評価の相関性(Wiggins & McTighe, 2005)及びオンライン学修の特性を念頭に置いた学修設計を行った。さらに、メタ認知力向上の具体的なアプローチとして、授業後の翻訳パフォーマンスの評価及び自己評価に基づいた、振り返りによる省察を採用した。この実践例を参照しながら、その特徴・意義・課題の考察を通して持続可能な翻訳学修について論じる。

【参考文献】

- C・ファデル、M・ビアリック、B・トリリング (2018) 『21 世紀の学修者と教育の4つの次元』(第2版) 北大路書房
- OECD (2013). OECD Skills Outlook 2013: First Results from the Survey of Adult Skills, OECD Publishing.
- Wiggins, G., & McTighe, J. (2005). Understanding by design. Upper Saddle River, N.J.: Pearson Merrill Prentice Hall.

第2日目(9月5日) Zoom C 9:00 – 9:30

C-1 司会：大久保 友博

De-feminizing translations: The case of Wakamatsu Shizuko's translation of 'The Sailor Boy'

Paula Martínez-Sirés (Nihon University)

This paper aims to re-examine the figure of Japanese translator Wakamatsu Shizuko (1864-1896) from the perspective of feminist translation theory (FTT) by qualitatively analyzing the translator's voice and the *genbun itchi* style used in 'Wasuregatami' (1890), Wakamatsu's translation into Japanese of Adelaide Procter's poem *The Sailor Boy* (1858).

Genbun itchi was a literary movement that surfaced in Meiji period Japan which encouraged Japanese writers to free themselves from classical conventions in order to write as they spoke. However, this stylistic freedom was restricted to men writers. Women writers were encouraged by their environment, here understood as culture and society, to use more classical, "feminine" forms of language (Seki 1997, Saito 2010). In spite of this, Wakamatsu Shizuko's use of the un-gendered *genbun itchi* style and the 1st person male narrator voice in 'Wasuregatami' enabled her translator persona to gain access to an un-gendered, neutral style in her translations. This stylistic choice could then be re-interpreted as a mechanism that, to a certain point, freed her from the conventions and constraints that the environment forced upon women writers and translators at that time. Furthermore, since Shizuko also used the *genbun itchi* style in her later, more well-known translations of *Inakku, aaden monogatari* (1890) (Alfred Tennyson's *Enoch Arden*, 1864) or *Shōkōshi* (1890-1892) (Frances Hodgson Burnett's *Little Lord Fauntleroy*, 1885-1886), this paper will defend that 'Wasuregatami' should indeed be understood as the turning point in Shizuko's career as a translator.

Whereas FTT theorists Simon (1996) and Flotow (1997) believe that feminizing the language in translation made women writers visible in a male-dominant world, this paper will argue that Wakamatsu Shizuko's use of the de-feminizing *genbun itchi* style in her translations allowed her to experiment with language and to reclaim "neutral" literary devices generally denied to women translators that helped to build a new relation between the woman translator and her environment. This agrees with Furukawa's (2017) view that Western feminist theory must be carefully adjusted to a certain extent when applied in the Japanese target culture.

【参考文献】

- Flotow, L. van. (Ed.). (2011). *Translating Women*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- Furukawa, H. (2017). De-feminizing Translation. To Make Women Visible in Japanese Translation. In L. v. Flotow & F. Farahzad (Eds.), *Translating Women — Different Voices and New Horizons*. London and New York Routledge, 76-89.
- Saito, R. (2010). Writing in female drag: Gendered literature and a woman's voice. *Japanese Language and Literature* 44(2): 149-177.
- Seki, R. (1997). *Kataru onnatachi no jidai: Ichiyō to Meiji josei hyōgen*. Tokyo: Shin'yōsha.
- Simon, v. F. (1996). *Gender in Translation*. London and New York: Routledge.

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom C 9:40 – 10:10

C-2 司会：大久保 友博

Our Bodies, Ourselves のフェミニスト翻訳の試みと読者受容

古川弘子(東北学院大学)

本発表の目的は、*Our Bodies, Ourselves* (The Boston Women's Health Book Collective, 1984; 以下, OBOS と略す) の日本語版『からだ・私たち自身』(ボストン女の健康の本集団, 1988; 以下, OBOSJ と略す) のフェミニスト翻訳の試みの読者受容について考察することである。

OBOS は女性の協同作業により編集・執筆され、女性のために出版された、女性のからだについての本だ。当時は出産、流産、月経、性行為などに関する教本の多くが男性によって書かれ、女性の権利が軽んじられていた。そういった状況に風穴をあけたのが OBOS だった。1970 年に簡易版、1973 年の商業版が出版され、6度の改訂を経て通算販売数は約 450 万部に上る。「女性の健康のバイブル」(Davis, 2007, p. 2) と称され、世界で 30 以上の言語に翻訳されている (Bessaih & Bogic, 2020, p. 520; Kline, 2010, p. 15)。

OBOSJ は OBOS の全章を訳しているが、日本独自の視点からの編集・翻訳がなされている。特に画期的なのは女性器の新たな用語を提案したことだ。女性器を表す用語に使われる「恥」や「陰」といった語が、性や女性器が恥ずかしく汚らしいものであるという負のイメージを作ってきた。さらには、女性が自分のからだについて知ろうとしてはいけないといった社会的・文化的圧力が生まれた。この状況に対して、OBOSJ の翻訳者は性器名称のような解剖学用語を変えるのは簡単ではないことを認識しながらも(荻野, 2014, p. 100)、「一見ナイーブともみえる言い換え実験を通して、女が自分のからだをありのままに受け入れ、いやらしいもの、恥ずべきものとして隠したりせずに率直に表現していくようになるためには、言語の再考も大切な作業であることを主張しようとした」(荻野, 2014, p. 100)。この試みの結果、「性毛」などは辞典にも収録されるようになった (OBOS, 2011, p. 13)。

そこで、本研究では大学生を対象としたアンケート調査を行い、OBOSJ が「恥」や「陰」を使わない新しい女性器名称を提案したこと、その結果として日本語名称に変化がみられることについてどのように考えるかを探っていきたい。さらには、女性器名称に「恥」や「陰」が使われることを大学生がどのように捉えているのかについても探りたい。

【参考文献】

- Bessaih, N. & Bogic, A. (2020) Translating Feminist Texts on Women's Sexual and Reproductive Health in von Flotow & Kamal (eds.) *The Routledge Handbook of Translation, Feminism and Gender*, New York: Routledge, pp. 518-527.
- Boston Women's Health Book Collective (1971, 1973, 1976, 1979, 1984, 1998, 2005, 2011) *Our Bodies, Ourselves*. New York: Simon and Schuster.
- Davis, K. (2007) *The Making of Our Bodies, Ourselves*, Durham: Duke University Press.
- Kline, W. (2010) *Bodies of Knowledge*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- 荻野美穂(2014)『女のからだーフェミニズム以降』(岩波新書)岩波書店
- ボストン女の健康の本集団, 日本語版翻訳グループ訳(1988)『からだ・私たち自身』松香堂

第2日目(9月5日) Zoom C 10:20 – 10:50

C-3 司会：大久保 友博

太平洋戦争・日本占領期におけるキリスト教宣教関係者の翻訳通訳活動

武田珂代子(立教大学)

キリスト教宣教関係者による翻訳通訳活動については、「宣教にともなう言語学 (missionary linguistics)」や歴史研究の観点などから、布教目的の通訳者の調達方法、宣教師による現地語の文法書や辞書作り、聖書や現地語文献の翻訳などが主な研究対象となってきた。本発表では、連合軍による太平洋戦争・日本占領遂行 (1941-1952) で翻訳通訳関連の任務についてキリスト教宣教関係者・信者に焦点を当てる。調査分析の対象としたのは、占領行政官養成プログラム、各連合軍国における戦時日本語学校、戦犯裁判などに関する一次資料と、日本におけるキリスト教宣教師の活動、米国諜報機関と宣教師の関係、占領軍政における宗教政策などに関する二次資料である。

まず、太平洋戦争開戦前後に日本から引揚げた米人・カナダ人宣教師とその家族、また、開戦時に教会の支援を得て米国・英国に留学中だった朝鮮人・台湾人キリスト教信者の中で、翻訳者、通訳者、日本語学校教師、情報提供者として連合軍の対日諜報活動や日本占領の準備に関わり、戦後は占領軍政や戦犯裁判に従事した事例について説明する。高い日本語能力と日本社会・文化に対する知識を有し、かつ「信用できる」(つまり、非日系人) 人材の不足が深刻な中、交換船で帰国した宣教師とその家族は連合軍政府にとって貴重な情報源であり、即刻、戦争遂行への協力を求められた。彼らの中には、戦後の外交・占領軍政で要職についた者も少なくなかった。

次に、教会やミッションスクールといった「キリスト教人脈」を通して、検閲を含む連合軍の占領活動や戦犯裁判で翻訳通訳職に就いた日本人のキリスト教信者について述べる。マッカーサーによる占領軍政と教会・宣教師との関係に注目しながら、具体的な事例を通して、信仰と英語習得、翻訳通訳職への応募過程、占領軍に対する態度との関係について初期的検討を行う。

布教活動のために習得した日本語や日本に関する知識を布教の対象とした人たちを敵とする戦争遂行に貢献するために使用したという事実、また、連合軍の占領活動で英語能力のある日本人キリスト教信者が果たした役割を考察する中で、「布教や信仰のための外国語習得と翻訳通訳活動」や「戦争遂行のための国家による外国語話者の動員」という議論を発展させるとともに、宣教師・教会と国策の関係を言語的側面から探究することを試みる。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom C 11:00 – 11:30

C-4 司会：藤濤 文子

日本語・シンハラ語の擬音語と擬態語の翻訳における直訳不使用の効果と意義

バーラスーリヤ バーラスーリヤ ムディヤンセラゲ ウダーニ スガンディカー(宇都宮大学 M)

日本語はシンハラ語より擬音語・擬態語をはるかに豊富に持つ言語であり、日常会話はもちろん、公文書などを除くほぼすべての文体のテキストにおいて頻繁に使用されている。例えば、「ワンワンがいる」という幼稚な子供用語から「旅のからだでぼりぼり搔く」のような俳句にまでよく用いられている。日本語の擬音語・擬態語はシンハラ語の“wkqlrl Yio” (anukāraka śbda) に当たるが、それと異なり、「音はもちろん、感情、動き、状態など臨場感をもって表すことが可能であり、日本語表現の豊かさに大きく貢献している」(猪瀬, 2010) と言える。そのため、日本語の擬音語と擬態語の理解や使用は、多くのスリランカ人日本語学習者をはじめ、教師、翻訳者、通訳者にとって大きな問題になっている。本研究では、こうした問題の中で、実際の翻訳において日本語の擬音語・擬態語はシンハラ語でどのように表現されているのかを明らかにしようとするものである。そのために、まず夏目 1950『坊ちゃん』新潮文庫版に出現する擬音語・擬態語を集めた。次に、『坊ちゃん』の 2 種のシンハラ語訳である『PUNCHIHAMU』と『AWANKA GURUWARAYEKUGE KATHAWAK』からそれぞれの言葉に当てはまるシンハラ語訳の実例を集めた。最後に、それぞれの擬音語・擬態語を翻訳する際、2 人の翻訳者がどのような表現方法を使用しているかを検討した。その結果、

- ①. 日本語の擬音語・擬態語をシンハラ語では擬音語・擬態語以外の副詞・動詞・形容詞などを使って翻訳する。
- ②. 文全体としての発想を理解し、それに当たるシンハラ語の表現を使って翻訳する。
- ③. 日本語の擬音語・擬態語をシンハラ語の文字で書き表す。
- ④. シンハラ語に存在しない擬音語・擬態語を新しく作って翻訳する。

という 4 つの方法を取られていることが明らかになった。今回集めたデータ上では、あるシンハラ語に直訳できる擬音語・擬態語に対して、直訳方法を使用せず、①か②の方法の使用例があった。そのため、今後の課題として直訳可能な擬音語・擬態語であってもシンハラ語に直訳しないことについて検討したい。

【参考文献】

1. 猪瀬博子 (2010) マンガにみる擬音語・擬態語の翻訳手法. 通訳翻訳研究, (10), 161-176.
2. 夏目 (1950) 『坊ちゃん』新潮文庫
3. 飛田・浅田 (2018) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版; 新装版
4. Ranasinghe, P. (1990) *Punchi Hamu*, S.Godage Publication, Sri Lanka
5. Suraweera, A.V. (1995) *Awanka Guruwarayekuge Kathawak*, Pradeepa Publications, Sri Lanka

第2日目(9月5日) Zoom C 11:40 – 12:10

C-5 司会：藤濤 文子

日ア語翻訳に見られる異文化伝達とそのアプローチに関する考察

上川 アルモーメンアブドラー(東海大学)

翻訳の過程では、その対象となる SL と TL の両言語の相違には言語体系に基づくものと各言語固有の歴史や文化等によるものがある。その上で、その変換プロセスに伴う、両言語の表現における「明示化」または「非明示化(凝縮化)」という攻略法が使用されるのが基本となる。

本研究では、日本語・アラビア語翻訳における異文化の翻訳とそのアプローチの実態を調査するために、異文化伝達が表れている対象としての、日本をテーマとするウェブメディアと文学作品のテキストに限定し、日本情報多言語発信サイト「nippon.com」などのアラビア語による翻訳原稿及び日本文学作品(4作)の具体的なアラビア語訳のデータを題材に、日ア語の翻訳に於ける異文化伝達の攻略法の分析を行う。

これまでの研究では、英語などのゲルマン系やラテン系の言語を対象とした異文化伝達やそのアプローチの研究が中心であり、アラビア語を扱う考察や検証は皆無といった状況にある。各言語とその背景にある文化はそれぞれ異なるものであり、「異文化」が色濃く表れるテキストの翻訳において、アラビア語訳者はどのようなアプローチを講じるのかを探ることに研究意義がある。

本研究では、研究協力者としてアラビア語訳者5名によるインフォアラビア語による翻訳データを通して、訳者に求められる技法と両言語の表現における「異文化伝達」の翻訳手法の一部を検証した。具体的な例の分析を全文通して行ったが、基本的には、分析点を、「語彙レベル」の分析と「コンテキストレベル」での分析の2種類に分ける。語彙レベルの分析では、語彙に関する問題に焦点を絞り、日本とアラビア語圏の社会文化の差異が大きく表れる日本独自の文化要素の伝達とその表現方法を分析する。その上で日本の社会文化や歴史など独自の文化要素を訳者がどう訳しているかを調べ分類することにより、訳者が異文化である日本文化を、アラビア語圏の受信者にどのように伝達しようとしているかを考察する。

分析事例:1.日ア語間にある言語上の差異による訳出処理、日本の文学作品「雁」(森鷗外著)より:(1)日本語原文(ST):寂しい無縁坂を降りて、藍染川(あいそめがわ)のお菌黒のような水の流れ込む不忍(しのばず)の池の北側を廻って、上野の山をぶらつく。

アラビア語訳(TT)(マイサラ アフィフィ訳、2019 alkarma books):

يهبط منحدر «مونتزاكا» شبه المهجور، ويدور حول الجهة الشمالية من بركة «شينوبازو» حيث تصب مياه نهر «أيسومه» التي تشبه سواد أسنان السيدات (*)، ثم يصعد التل عند حدائق «أوينو»

上記の例において見るように大部分の慣用的表現のもとには独特の比喩が使用される。上記の例では、訳者は、翻訳方法(逐次語訳) + (注による解説)を採用している。

【参考文献】

- アルモーメンアブドラー(共著)(2020)『日本語・アラビア語の翻訳研究の諸相、翻訳教育と異文化コミュニケーション』(デザインエッグ)
- 高橋希衣(2011)「文学作品の翻訳に見る異文化伝達法」『独語独文学研究年報』37巻p. 20-45(北海道大学ドイツ語学文学研究会)
- 藤濤文子(2004)「文学テキストの翻訳にみる異文化コミュニケーション行為」『Japanische Gesellschaft für Germanistik』115巻p.30-42(神戸大学ドイツ文学論集刊行会)

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom C 12:20 – 12:50

C-6 司会： 藤濤 文子

漫画作品におけるキャラクター言語の英語翻訳:『SPY×FAMILY』のアーニャとヨルの言葉遣いとキャラクターを考える

イーヴァンソン 房枝(ヨーテボリ大学)

様々な言語変種を利用して登場人物の属性を受け手に効果的に伝える役割語・キャラクター言語は、日本語フィクション作品の登場人物のキャラクターを印象付ける重要な手段の一つであり、その及ぼす効果が翻訳版読者に正しく伝わるよう訳出することが望ましい。しかし、文法・表記体系や文化的背景が大きく異なる英語への翻訳においてそれを達成するのは困難を伴う。

本発表では、山木戸(2018)を参考に、イーヴァンソン(2021)の発展研究として、遠藤達哉氏の漫画作品『SPY×FAMILY』を取り上げ、キャラクター言語の英語翻訳考察のケーススタディを行い、英語翻訳版と対照して分析する。同作は、スパイ任務遂行のために形成された仮初めの家族(父はスパイ、母は殺し屋、娘は超能力者)の日常とスパイアクションをコミカルに描いたもので、父・母・娘は互いに正体を隠しているが、心を読める娘だけは全てを知っているという設定である。日本語版・英訳版ともに単行本第 3 巻までを調査資料とし、娘・アーニャと母・ヨルの言葉遣いに焦点を当て、彼らの特徴的な言語表現について、役割語・キャラクター言語の観点から整理し、英語翻訳版における対応を分析した上で、キャラクター分類、物語における役割、英訳上の要点について考察する。

アーニャは超能力者という非実在的なキャラクターであるため、特殊なキャラクター言語が適用されている。話し方の特徴である「過剰な<幼児語>」をベースとした「<幼児語>からの逸脱」の要素は、幼さゆえの限られた知的能力と、超能力の持ち主であるという「愚者と賢者」の二面性を兼ね備えた彼女のキャラクター性を象徴している。ヨルへの「天然」というキャラ付けは、物語中に笑いを誘うコミックリリーフの効果があり、天然キャラの「人に好かれる」という要素は、キャラクターとしての好感度を上げる効果があるものと思われる。また、ヨルの度を越えた礼儀正しさは、彼女の裏の顔である反社会的な「殺し屋」のイメージから逸脱しており、キャラクターとしての意外性を生み出す効果がある。『SPY×FAMILY』の英訳版は、シークエンスの整合性と訳文表現の自然さ・読みやすさが優先されているようだが、可能な部分は調整を施した上でキャラクター言語的特徴を訳文に適用し、英語として違和感のない範囲でアーニャとヨルのキャラクター性を効果的に伝えることに成功していると言える。

【参考文献】

イーヴァンソン 房枝(2021)「特異な主要キャラクターのキャラクター言語に見られる過剰性と逸脱性 —アーニャ(『SPY×FAMILY』)とナカタさん(『海辺のカフカ』)の日英対照—」金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト(4)』大阪大学大学院文学研究科 1-48.

[Online: https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/79003/mhp_04.pdf]

山木戸浩子(2018)「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」『通訳翻訳研究への招待』19:1-21.

[Online: http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol19/No_19-001-Yamakido.pdf]

第2日目(9月5日) Zoom C 13:30 – 14:00

C-7 司会：古川 弘子

「重訳」の再考——韓国絵本『あめだま』の考察を通して

尹 惠貞(ゆん・へじょん)(一橋大学大学院言語社会研究科、博士研究員)

従来の「重訳」は、原文(起点言語)とは異なる言語を参照して、違う翻訳者が翻訳文(目標言語)に翻訳することをいう。

2017 年、韓国で絵本『알사탕(アルサタン)』(起点テキスト「Source Text」、以下 ST)がペク・ヒナ作で出版された。地の文及び台詞は標準韓国語で書かれている。その翌年の 2018 年、日本で『あめだま』(目標テキスト「Target Text」)が長谷川義史の翻訳で出版された。地の文及び台詞が全て関西方言で訳出されている。

藤本朝巳(2007:20)は、絵本では「文章」は読むだけでなく見るものであり、「絵」は見るだけでなく読むものなのだと述べているように、絵本は絵と言葉に相互作用がある。ここから、絵本においてはそもそも翻訳がどのように現われるのかという問題が生じる。そんな中、翻訳者長谷川がトークイベントで、自分は「韓国語ができない」という事実を述べた。翻訳者長谷川本人に問い合わせたところ、「翻訳するときは意味がわかる直訳文をいただいています。そこから絵本の画面を見て作者の思いを想像して。一番伝わりやすい日本語を探します。文章を組み立てて作者の思いをもう一度考えて。日本語の言葉で声に出して読んでみて…」という回答を得ることができた。直訳文を参照することは、原文(起点言語)とは異なる言語(日本語)を参照してはいるが、目標言語である日本語(但し、関西方言)に翻訳しており、「重訳」の一種と見ることができるのか。また、絵本は上述したように絵と言葉に相互作用がある本である。「直訳文」を参照してもそれは絵本テキストの「一部」であって、全てではない。「残りの一部」である絵は ST を参照して翻訳していることになるので、原文(起点言語)とは異なる言語を参照して、という前述した「重訳」とは異なり、絵本の翻訳ならではの特殊性と言える。

以上から、絵本において「重訳」という理論を当てはめることが可能であるのか。「重訳」を韓国絵本『あめだま』の考察を通して、再考することを本発表の目的とする。

【参考文献】

- Dollerup, Cay. “Relay and support translations”, Chesterman, Andrew & Natividad Gallardo San Salvador & Yves Gambier (Eds). 2000. *Translation in context*. Selected contributions from the EST Congress, Granada 1998. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. 17-26.
- Kittel, Herald & Frank, Armin Paul. “Introduction,” *Interculturality and the Historical Study of Literary Translations*. Eds. Harald Kittel, Armin Paul Frank. Berlin: Erich Schmidt Verlag, 1991: 3-4.
- モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』藤濤文子監修・翻訳、2013 年。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom C 14:10 – 14:40

C-8 司会：古川 弘子

ベトナムにおける日本文学の翻訳の事情:2002 年～2018 年の段階

Nguyen Thanh Tam(神戸大学・国際文化学研究推進センター協力研究員)

翻訳が異文化間の交流の手段であるとしたら、翻訳書はその交流の実際の成果であるだろう。JAPAN FOUNDATION の文学翻訳作品のデータベース(1)によって、ベトナム語に訳された文学書は 244 件あり、他のアジア国のインドネシア語や韓国語の翻訳書より比較的に多いという。日本とベトナムは、中国から漢字を借用してきたことから、「漢字文化圏」の言語的文化的な共通点が多いと思われる。両国の交易関係は 16 世紀にまで遡り、外交関係が 1973 年に結ばれ、ようやく 1990 年代に入ってから現在まで安定的に継続している。翻訳の歴史では、文学交流も 20 世紀初頭には始まったが、戦争や歴史問題によって、日越の関係及び文化・言語交流が何度か中断された。この理由で、ベトナムにおいて長い間日本語の翻訳者が著しく不足しており、日本の書籍の翻訳は数が少なく、ジャンルの多様性も低かった。1990 年前半までの長い時期に訳された日本の書物は主に文学作品であり、中でロシア語・フランス語などといった媒介言語を介した訳、すなわち重訳が全体の約 91%である(Nguyen, 2013)。2000 年代から、実質的な外交関係が結ばれ、前の段階で回復された日・越関係が経済面のみならず、社会・文化面での協力関係が深まっている。ベトナム社会に経済強国であり、文化的伝統が豊かな日本のイメージが伝えられてきた。日本のことを懂れ、日本語の学習者が急増し、日本の文化・ライフスタイルを知る手段としての翻訳書が次々に出版されている。2002 年にベトナムがベルヌ条約に加盟し、翻訳書の出版事柄に大きな変化を起した。その中には著作権を明確に表示する必要性や読者の要求が述べられている。日本文学の直接翻訳が多く行われるようになると共に、重訳は減少する傾向にある(Nguyen, 2013)が、ジャンルの多様化を究明する問題が残っている。本研究は 2002 年から現在(2018 年ごろ)にかけて、文学の翻訳書の一覧表作成し、他のジャンルとの比較的な関係で調査し、日本書籍の翻訳事情を明らかにする。また、ベトナムと日本の交流関係の変化及び社会的背景といった要素と関連づけることによって、日本事象に対してベトナム人の関心の変移、日本語書籍の出版社・翻訳者の人材の特徴を考察することとする。

【参考文献】

Nguyen Thanh Tam(2013)「ベトナムにおける日本文学の重訳-歴史的背景と異文化要素の翻訳」『通学翻訳研究』第 13 号: 79-95.

【注】

(1) JAPAN FOUNDATION 文学翻訳作品のデータベース、URL : <https://jltrans-opac.jpif.go.jp/Opac/search.htm>

第2日目(9月5日) Zoom C 14:50 – 15:20

C-9 司会：篠原 有子

NHK 国際放送の歴史：NHK WORLD-JAPAN に至るまで～課題と今後の展望

高橋弘行(NHK WORLD-JAPAN、NHK 国際放送局)

本発表者のもつ問題意識とは、NHK で英語放送に携わってきた立場の者として、歴史上、日本の置かれた立場や、そのときどきの国際情勢に応じて、日本からどのような英語ニュース発信が行なわれてきたかを、NHK の国際放送の発展の経過のなかで振り返ろうというものである。制作現場の声や同時通訳者と交わした意見交換なども踏まえながら、ニュース翻訳の現在の状況を考察する試みでもある。また近年、NHK では、こうした英語ニュース動画に AI による多言語字幕を掲載し、英語以外を母語とする視聴者へのサービスを始めた他、「やさしい日本語」を用いたニュース配信の試みが続いている。こうした情報提供のアプローチの多様化についても付言する。

現在の NHK の英語ニュース放送は大別して、毎夕の総合テレビのニュースの副音声として流される「音声多重放送」と、多言語放送「NHK WORLD-JAPAN」の英語専門チャンネルで流される「NEWSLINE」や「NEWSROOM TOKYO」などの「英語ニュース」の2種類に分類される。両者ともに放送原稿の基礎となるのが NHK の「日本語」ニュース原稿で、これを日本人ライターが翻訳、ネイティブのリライターのチェックを経て、日本人責任者の最終チェック、の順で英語化が行われる。しかし森羅万象を扱うニュースの世界では、訳語の選択をめくり単なる日本語→英語への変換、という次元から、日本の情報を世界に向けどのように「発信」すべきなのか、という根源的な問いかけを担当者に迫ることもしばしばである。ひとたび放送されれば、その訳語選択は海外メディアが引用する場合も多く、大きな影響力を持つからである。

本発表では、このような現在の英語ニュースの姿に至るまでの歴史的な経緯を辿り、現状を踏まえて検討する。英語放送は、かつて日本からの情報発信としての役割を国から期待される中においてはじまった。さらに戦後は日本の復興と経済成長に伴って、日本経済について英語で発信する番組が制作され始めるなど、時代の要請に応じた放送の姿が模索されてきた。こうした海外への外国語放送の発信の経緯に考察を加えておくことは、日本からの情報発信の未来像を考えるうえで貴重な試みであると考えている。

第 2 日目(9 月 5 日) Zoom C 15:30 – 16:00

C-10 司会：篠原 有子

司法通訳における倫理観と倫理教育－欧米基準を基にした日本の現状分析と将来への提言

毛利雅子(名古屋市立大学大学院)

日本の司法通訳は法整備もされておらず、採用、語学力、倫理教育など全国共通基準が存在しない。したがって、通訳人採用は各司法機関(裁判所、入管、税関、警察、検察など)の裁量によるものであり、採用後の通訳人教育も限定的である。研修が実施されているところもあるが、一般的な通訳業務に対する注意、簡単な司法制度の説明などで、根本的な通訳人教育は採用前も採用後も成されているとは言えない。

通訳業務から鑑みると、言語運用能力、通訳能力は当然求められることではあるが、言語教育や通訳訓練を受けたか否かは明確に確認されるわけではなく、採用時の簡易な試験で採否が決定される。これ自体も現状は大きな課題を抱えているが、加えて日本の現状で欠落していると考えられるのは通訳人に対する倫理観の確認、および倫理教育である。これは、採用時、倫理観に関する試験がなされないこと、また採用後の倫理教育も司法機関から、「きわめて一般的な倫理観」を述べる程度に留まっている現状を指し示している。例えば、採用後の研修において通訳人に求められる倫理観として提示されるのは、仕事上知りえた情報を外部に漏らしてはならないという守秘義務は当然であり順守すべきものであるが、通訳人に限らず社会通念として求められる倫理観であり、司法通訳人に適用するには非常に心許なく概略的なものでしかない。しかし、司法と言語に関わるものに求められる倫理観は、そこで見聞する情報に対する守秘義務のみならず、言語に対する中立性や忠実性といった倫理観、被疑者および関係者に対する中立性の維持など、通訳人として当然求められるべきものがあるが、これらについては詳細な教育も提供されないだけでなく、そもそも採用時の試験すら存在しない。しかし、司法通訳人はその性格上、①あらゆる情報にアクセスする可能性がある、②通訳人の発言・通訳談話はもとより、文化の仲介者(cultural broker)としての談話、母語・他言語に対する中立性・忠実性が求められる、という点を鑑みると、一般的な「倫理観」という認知では到底及ばず、また倫理教育としても全く不十分である。

本論では、日本の現状を俯瞰し分析、米国連邦政府、NY や CA などの各州、また EU で実施されている通訳人倫理に関する試験および採用後の教育を参照しながら、日本の状況にふさわしい通訳人倫理教育について提言を行いたい。

【参考文献】

- Cheng, L., Sin, K.K. & Wagner, A. (eds.) (2014). *The Ashgate Handbook of Legal Translation*. Dorchester: Ashgate.
- Coulthard, Malcom., Johnson, Alison. & Wright, David. (2017). *An Introduction to Forensic Linguistics*. London/New York: Routledge.
- González, Vasquez & Mikkelsen. (2012). *Fundamentals of Court Interpretation – Theory, Policy, and Practice (Second Edition)*. Durham: Carolina Academic Press.
- Mikkelsen, Holly. (2017). *Introduction to Court Interpreting*. London/New York: Routledge.
- Mulayim, S. & Lai, M. (2017). *Ethics for Police Translators and Interpreters*. London/New York: CRC Press.
- Ng, Eva.N.S. & Crezee, Ineke H.M. (eds.). (2020). *Interpreting in Legal and Healthcare Settings*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Valero-Garcés and Tipton. (eds.) (2017). *Ideology, Ethics and Policy Development in Public Service Interpreting and Translation*. Bristol: Multilingual Matters.